会議録

会議の名称	西東京市公民館運営審議会平成21年度第9回定例会会議記録
開催日時	平成21年12月16日（水曜日）　18時30分から20時35分まで
開催場所	田無公民館　第2学習室
出席者	会長：森忠 副会長：渡辺文子 委員：西嶋剛昭、定盛秀俊、千葉桂子、古賀節子、大島眞之、福島憲子、加藤真理、上田幸夫 職員：相原館長、山本主幹、近藤係長、寺嶋分館長、小笠原分館長、玉木分館長
欠席者	中嶋美沙子、須磨田純子、柴山隼、萩原建次郎
議題	(1)　第8回定例会の記録について (2)　報告事項 1　行政報告 2　事業計画書・報告書について 3　公民館だより編集室報告 4　都公連研究大会企画委員会、同大会報告 (3)　事務連絡及び情報交換 (4)　次回の日程について
会議資料の名称	(1)　事業計画書 1　青年向け環境講座（田無） 2　考えよう、わがまちの財政はどうなっているのか、どうなってしまうのか（芝久保） 3　歴史研究講座・藤原京出土の木簡文字を読む（芝久保） 4　文学講座　教科書文学再生計画（谷戸） 5　黙って使用して著作権に触れませんか（駅前） 6　子どもいろいろ体験教室「光を通して模様を楽しもう！コロコロ光の万華鏡づくり」（駅前） (2)　事業報告書 1　西東京の歴史を歩く　爽秋編（柳沢） 2　マルクス入門講座（柳沢） 3　やぎさわアカデミー情報発信ゼミ「目指せアナウンサー」（柳沢） 4　余暇時間の有効講座（芝久保） 5　公民館まつり・紙のからくりカミカラの作成とお話（芝久保） 6　健康講座「ナチュラルヨーガで心も体もリラクゼーション」（谷戸） 7　セカンドライフ講座「あなたの明るい一歩を応援します」（ひばり） 8　健康講座「経絡リンパマッサージ」（ひばり） 9　わがまちの財政はどう変わったか「財政分析入門講座」（駅前）
記録方法	□全文記録　□発言者の発言内容ごとの要点記録　■会議内容の要点記録
傍聴者	■有り（1人）　□無し

会議内容

(1)　第8回定例会の記録について

○副会長：

記録の修正についての申し出等を確認する。

○職員：

特になし。

○副会長：
　配付した記録のとおりとする。

(2)　報告事項
　1　行政報告
○副会長：
　報告を受ける。

○館長
　1点目、ひばりが丘公民館の小林分館長は1月から復帰することになった。
　2点目は12月定例議会について、一般質問で柳沢公のお笑い講座「M-1グランプリ」の事業内容について好評価を受けた。そのほか、市の施設全体の問題であるが、便座を洋式化してはどうかという質問があった。

○委員：
　便所の改修についてはいつごろ行う予定と回答したのか。

○館長：
　公民館への質問ではないので、具体的には回答していない。

○副会長：
　質疑を終結する。

　2　事業計画書・報告書について
○会長：
　質問・意見を受ける。

○委員：
　田無公の青年への環境講座はとても大切な内容だと感じる。PR法だが、対象世代はチラシや広報を最も見ない世代ではないか。できれば、市内の高校に直接発信することはできないのか。
　駅前公の著作権に関する講座だが、先日の公民館大会の講師もその専門家であり、重要性について学んだばかりだが、受講者に意義を知らせるばかりでなく、多くの市民に知らせてくれるとありがたいと思うがどうか。

○職員：
　映画上映なども気をつけて行いたいと考えている。今回は単発の講座になってしまったが、状況を見て今後につなげていきたい。

○職員：
　市内の高校へのPRに努めたい。

○委員：
　芝久保公の財政講座の講師は、西東京市の事情を理解している人なのか。

○職員：
　駅前公の財政学講座の講師と同じく財政学の専門家だ。公民館講座の受講生が中心になって作成した市民財政白書を踏まえて、専門の立場から勉強をして臨んでくれるという話だ。

○委員：
　やぎさわアカデミーの受講生の年代層は。

○職員：
　今回は全て20歳代前半の方で、偶然だが均一化していた。

○委員：
　若い人が集まらないという報告を受けることが多いが、今回はなぜ集まったのか分析しているか。

○職員：
　報告にも書いたとおり、タイトル次第で人は動くということかと思うが、しかし、10人の募集に10人の応募がやっとであり、この事業にとっては画期的なことではあるが、他と比較してどうなのかという事までは分析しきっていない。

○副会長：
　質疑を終結する。

　3　公民館だより編集室報告
○会長：
　報告を求める。

○委員：
　1月号の1面は、文部科学省の英語版「KOUMINKAN」のパンフレット発行を記念して、西東京市の外国人の公民館の利用実態について、記事にした。2月号は、昨年度の好評であった公民館講座に参加した方々の声を綴る、を予定している。
　本日は、12月号4面に穴埋めとして活用した「ケーキ作り」と「地域イベント」に関する記事であるが、どう感じたか意見を聞きたい。編集会議の中でも意見は出たが、そういうときには何を使うのが相応しいのかも確認したい。

○委員：
　どうしてこの内容なのか、という疑問を感じた。あの内容ならば、サークル活動の様子でも伝えた方が良いと思った。もしも穴埋め記事が必要なら、普段から事業や学習内容をまとめておいて、使ってはどうなのか。もしくは、利用者懇談会で出た意見を取りためておいて使っても良い。とにかく、公民館に直接関わる内容の記事で埋めてほしいし、用意しておくべきだ。

○委員：
　確かにそのとおりだとは思う。ただ、穴が開くタイミングにもよろう。もしも初稿の段階からスペースが空いていたのであれば、載せなければならない記事は一杯あるはずで、きっと今回は最終校正の直前にでも穴が開いたものと理解したい。そのあたりは斟酌する必要はあろう。

○委員：
　参考にさせていただく。編集会議では、公運審コラムについてもあり方を検討し始めている。必要によっては、この会議での意見も聞くこともあると思うので、そのときはよろしく。

○委員：
　コラムについて確認する。前回入校した際に、初稿時に文字数を縮小してほしいという指示があり、それに従った。その後、再度の校正依頼もなく刷り上ったが、私の入校原稿と異なる内容になっていた、刷り上がりの内容では、私の真意が伝わらず曲がって伝わる恐れがあり、大変遺憾だ。きち

んと念校を入れるよう要望したい。

○職員：
　原稿との差異が発生していたにもかかわらず念校を怠っていたとすれば、お詫びのしようもない。明日担当に事実確認をして、後刻連絡させたい。このようなことがないよう注意喚起する。

○副会長：
　ほかになければ、質疑を終結する。

　4　都公連研究大会企画委員会報告、同大会報告
○会長：
　報告を求める。

○委員：
　大会が終わって気が休まったところだが、今後は反省をする時期になる。既に、大会直後から会場までの案内が不足していたのではないかとか、資料が不足していたのではないか、という意見は上がっている。参加者の声は、できる限り実行委員会に届けて次回につなげたい。
　今回は課題別集会のみの形態であったために内容は深められたのではないかと思う。各分科会ともに講師とは何度も折衝し、作り上げてきた。興味を持って参加できたのではと自負している。

○副会長：
　参加者の感想を述べてほしい。

○委員：
　第2課題別集会に参加。初めて参加したので緊張した。まずは多くの話を聞いてこようと思っていたら、グループに割り振られた参考事例を元にしての議論ということになった。事例の事業の評価をするという趣旨で、私たちの班は「裁判員制度」の講座を課題にしたが、参加者に若者が少なく、2回目以降の参加者が減少してしまったという事例であった。
　協議したグループの構成だが、私と同様初めて大会に参加した人が多く、学生もいたり、職員も若手の方だった。討議では、若い人を呼び込みたければ若い人の意見を聞かなければならないということ、若い人は広報紙を見ていないという結論だ。議論の中で、小平の職員は学校にも配布するし、街頭でチラシ配りをしているということだ、さらには戸別にチラシを入れる努力もしているという。人を集めるという強い意思を感じ取れた。小金井市の委員からは、土日に講座は行わないし、保育付きの講座も無いという情報を聞いて、正直驚いた。
　講師からのアドバイスだが、魅力あふれる講座とは、自分が主体的に参加できるか、持続できるか、楽しんで参加した上にエンパワーメントを地域力につなげることができたか、ということで、私は大変貴重な意見として、収穫であったと思う。

○委員：
　第1課題別集会に参加。助言者の問題提起だが、三多摩テーゼの確認。1980年代の社会教育の終焉論に伴う、行政と市民との位置関係の変化。施設利用者の消費者としての立場が優先するあまりに、学習者がサービスの客体となり、サービスをどう受けるかという感覚が立ち入り、それが施設の有料化にもつながっているのではないかという現状。指定管理者制度の課題についてもきちんと考えるべきという提起を受けた。
　グループ討議に移ったが、各市の状況・現状を確認しあった。その中から、それぞれ欠けているものは何かを考えた。その後、8グループの発表の後に助言者からのまとめがあり、文化施設も独自性と創造性が試されている。学びのデザイン力が問われており、市民と職員の一致協力した体制が必要とのことだ。

個人的な感想だが、小金井市の市民の参加が多く、その中でも小金井市独自の制度である「企画実行委員制度」の委員は大変公民館に対するこだわりが強い方がいた。職員とともに事業を考えて実行する、それを公運審が評価するというシステムになっているそうで、企画実行委員の方々は大変積極的な人柄の方が多いと感じた。市民の力量で新しい公民館事業もスタートさせており、公民館を支えているのは自分たちだという自負心が旺盛だ。ただし、他の市の参加者と共有することは難しかったのではないかと感じた。

○委員：
第1課題別集会に参加。西東京からの参加者も大変目立っていたと思う。事実、4つのグループの発表は西東京からの参加者であったことは、その査証だと思う。私も小金井の企画実行委員が多く参加していたという印象が強く、公運審はどうしているのだろうかという疑問を生じた。とにかく目立っていたという印象だ。

○委員：
第2課題別集会に参加。参考になったことはあまりなかったと感じた。
運営面の感想だが、助言者が進行役から講義まで全て行っていた。課題別の企画運営委員が進めるべきところまで、助言者が行ってしまうのは問題と思う。また、講義時間も大変長く、ディスカッションの時間を奪っていた。1グループの人数も多く、10人も参加者がいては、一通り意見を述べたら既に討議時間の半分が過ぎていて、結論に結びつけることは不可能だった。

○委員：
第3課題別集会に参加。地域の仲間作り、公民館講座から自主グループ化への展開についてが課題であった。小平市のシルバー大学参加者の事例と、小金井市の江戸野菜作りによる町づくりの事例を聞いた。その後、グループ内で、公民館の良い点、悪い点を述べあった。
助言者から、学習により参加者が変化し、変わる楽しさを知ることが大切、その変化の力を地域の変化に結びつけることの大切さを学んだ。

○委員：
第5課題別集会に参加。インターネットの活用と広域連携という、今までにない分野のテーマ設定であった。助言者から、公民館で対応するためには、ハード・ソフトの諸整備が必要であることを印象付けられた。公民館独自のホームページの必要性やインターネットを活用した公民館活動に関して意見交換したが、これまで余りに検討したことがない話題であったためか、消化不良になった部分も散見した。
公民館の意義は、人が集まることでの相互学習の場という、いわゆる人間関係を作ることが肝心と思ってきたが、いよいよネット社会が当たり前になり、公民館だけがそうした分野から目をそむけている訳にもいかない現実があることは理解できたが、越えなければならない課題も大変多いこともわかった。今後は、ネットを使う人はふえる一方で、不可欠な問題である。

○委員：
第1課題別集会に参加。小金井市の企画実行委員のことだが、確かに発表する内容は自画自賛の面は否めない部分も多いが、制度としては珍しい内容ということもあり、私は参考になった。

○職員：
第3課題別集会に参加。助言者の発表を聞く時間が少な過ぎたのは不満。第3課題別は、9グループで8人程度に分かれた。最初から司会、記録、発表者を決めていたためにスタートがスムーズ、また助言者がグループワークのルールを説明してくれたのは奏功だった。
グループ討議で深まったことは、職員が目覚め、運審も頑張れば財政的には厳しい状況だが、展望は開けるものと感じた。公民館のある市は、そこが地域の拠点施設となる可能性を感じ取れた。

○館長：
　第1課題別集会に参加。毎年のことではあるが、グループ討議の時間が短い、その原因はグループ討議の発表の時間が長いからかと思う。もっとポイントを捉えて、時間内に発表してほしい。公民館大会の良い点は、他市の市民の意見を直接聞けることと思っている。大変参考になる。

○職員：
　第3課題別集会の参加。公民館という教育機関があることが市民の大きな力になっていると思う。公民館がそうした市民を作る源であることを感じられた。無料の施設であるから市民も育つものと考えれば、費用対効果は大変大きい。

○職員：
　第1課題別集会に参加。初めての大会参加であったが、助言者の一言で印象に残った言葉がある。助言者はある市の公運審だということだが、公運審に遅刻しそうになって駅からタクシーに乗って公民館名を言ったところ、その名前の図書館なら知っているが、公民館は知らないと言われてしまい愕然となったという。まだまだ関係者の努力が実っていない部分でもあり、地域への周知も公民館職員の仕事であると感じた。

○職員：
　第5課題別集会に参加。部屋の広さから無理もない点はあるが、グループ討議をするには人数が多い。5人程度ならば議論も深まると思うが、今回は物理的に不可能だった。また、グループ内に企画運営委員が入ったことが議論を深められない原因になった班があり、大変残念。企画運営委員は、助言者との間で十分議論を重ねており、ある程度の着地点が見えているのだから、他の参加者の意見は傾聴すべき立場だと思うが、結論ばかりを求めてグループ討議がかみ合わない部分が発生した。大会は研修の場であり実践ではないのだから、結論を急がずに様々な意見を出し合うことを目的とすべきだ。
　課題別集会のテーマ設定以前の問題と思うので、運営方法は十分検討してほしい。

○副会長：
　他に意見等がなければ、終結する。暫時休憩する。

（19時30分休憩）
（19時40分再開）

○会長：
　会議を再開する。

(3)　事務連絡及び情報交換
○会長：
　事務局を通じて「依頼事項」のプリントを配付したが、そこにも書いたとおりで、まずは結論ありきではなく、さまざまな考えを述べてほしい。そして、互いの考えを確認することからスタートしたい。他市の公運審だよりの実態、公運審コラムのその先、公民館のPRはどう考えるべきか、幾つか提起したので、どの切り口からでもいいので情報交換をしたい。

○委員：
　私たちは、公運審としての活動内容の伝達も必要と思う。私は公運審コラムへの入校の際に、委員としての立場や内容を特に意識しないで書いてしまった気がしてならない。どうして、あの欄が存在するのか。

○会長：
　コラムの目的は、公運審を市民に知ってもらうということだ。

○委員：
　それであればなおのこと、公運審とは、ということを伝えるのか、私たちの活動そのものを伝えるのか、活動ということであればこの場が主な活動である。もちろんここ以外にも何があるのかということを伝えるということか。例えば、私の研究の成果を披瀝しても、それが公運審の活動を伝えたことになるのか。
　普段の生活の中で、委員としての自覚の元に活動していることを書くのは分かりやすいとは思うが、どういう趣旨でコラムはスタートしたのであろうか。

○委員：
　この場の感想を書いたらどうなのか。

○委員：
　それもそうだと思うし、今月の公運審、というような記事を掲載してはどうなのか。今までのもので、受け取った市民が公運審というものを理解してくれているのかどうか反省している。

○会長：
　公運審の委員とはどういう役割で、またはどういう意見を持っている人たちなのか。そういうことを知らせていこうということで、自分の意見を書く場という趣旨で、今回のコラムはスタートした。審議会の内容を直接伝えるという場ではなく、個人的な意見を書くスペースだ。もちろん、公運審の委員という役職を自覚してだ。

○委員：
　ということは、どのような人となりの方が委員なのかを知ってもらう、という趣旨なのだろうか。そのことが、公運審や公民館を市民に伝えられていただろうかを考えてみてはどうか。

○委員：
　公運審コラムというタイトルを決めたときにも、何を書いたらよいか分からないという意見も同じく出たが、余り制約が多いとかえって寄稿しにくくなるのではないかという意見で今の姿に納まったと記憶している。人によっては事業の様子を書いたり、答申作りの苦労談を書いたりと、皆それぞれが公運審の役割を伝えたいという意識を持って書いていると思う。私は、いつの号も委員としてコラムを執筆している。それとともに、市民の意見もどう反映して書くのかということも大切か。
　都公連大会で知ったことだが、小金井市では全館の公民館だよりは当然のこと、各館の情報紙も出しているそうだ。振り返ると、田無の時代に芝久保公民館だよりを手作りで発行して、大変役立っていた。現在は6館の記事を載せなくてはならないので、大変情報量が多く全てを載せられない号もある。月1回のまとめには大変な苦労もあるが、工夫は必要かと思う。
　ターミナル型の公民館は多くの市民は知っていると思うが、住宅街にある地域型の公民館は場所を知っている人は限られる。少なくとも看板を出したりする努力が必要だ。

○委員：
　それは公民館側の努力の問題であり、今日のテーマとは外れていると思う。

○委員：
　委員部会で確認したことだが、福生市の公運審だよりだが、記事を埋めるのはそれは大変だということだが、10年以上も継続しているそうだ。500部作成して、委員が手渡しで関係者に配布する。手

渡す際、公運審の役割を伝えるには格好の機会という報告であった。

○委員：
　今の報告が出るということは、西東京市でも発行しようという意識か。

○委員：
　良いこととは思うが、記事集めが大変そうだ。

○委員：
　いきなり発行というのは大変になるだけで、私は問題が多いと思ってしまう。
　現在西東京市からは市報、公民館だより、議会報が定期的に宅配されていると思う。私はその中でも、公民館のものは地域の情報源だと感じていたし、市民は良く見ていると思う。現に、他市の職員や公運審委員からは、西東京市の公民館だよりの評価は高いし、活動は活発であると思われている。私の聞いた範囲の他市では、だよりは職員のみで編集しているそうで、各市の公民館だよりを見比べていると、行ったことのない市の公民館の様子もよく理解できる。
　公運審コラムに対する意見だが、この場の様子を伝えるというだけであれば、数回で書くことがなくなってしまうと思う。それよりも、公民館はこうなってほしいとか、委員だけれども私は市民なのだから、市民はこう考えているということを伝えていきたい。それで十分だと思う。公運審だより、では多分読んでもらえないと思う。

○委員：
　もちろん、公運審の活動はここだけではない、これは一部分だろう。公運審の活動を伝えるということは何なのだろうか。この会議に出席すること、大会に参加すること、それだけが活動ではないと思う。果たして何が活動なのかということを議論すべきだ。

○委員：
　であれば、私の結論は市民のアンテナになることに尽きる。それが活動の一部と思う。

○委員：
　委員になって公民館を学ぶ必要を感じ、さまざまな講座に勝手に参加しまくった。そしてどんどん見学し、私は公運審委員だということを受講者に伝えた。もちろん、講座のスタイルによっては伝えられなかったこともあったが、これもそうした時間があればという制約がつく。しかし、参加者の生の意見を聞けるというのは、良いこと。余り出過ぎるのも良くないと思うが、情報の収集と自分たちのことを知らしめる機会と思って参加してきた。

○委員：
　委員部会で知ったことであるが、委員が名札をつけて公民館を巡回する。名札を見て、市民から「公運審って何？」と聞かれるそうだ。直接伝えるという意味では似ているかと思った。

○委員：
　私の行ったことは独断での行為であるが、とにかく市民と接することは必要だろう。

○委員：
　私は、公民館だよりに記事を書かなければならないということを聞いて、与えられた任務ということで覚悟を決めた。活動の紹介だと説明を受けたが、果たして何が活動なのか、本当に考えてしまった。会議の内容だけではない、ということだけは理解できた。
　紙面づくりへの市民参加という手法は大変すばらしいことだ。これこそが公民館の良さだし、自らが関わるということが大事なのだと思う。

公運審としての独自のニュースペーパーを持っても、公民館だよりとダブってしまうと最後は読まれなくなってしまう。今のままコラムをうまく活用する方法を考えると良いのではないか。

○委員：
名札の話は、私も委員研修会で聞いて大変参考になった。
公民館の場所が分からないということを聞くことがある。いつも使っている利用者には当たり前のことも、他の多くの市民にはその存在は知られていない。公運審という制度など、もっと知られていないと思う。その存在を知らせることが大事だ。目的は、公運審を担っている市民がいるという事を知ってもらうという意味では、公運審だよりは必要と思う。知らせなくてはならないこと、必要なことは一杯ある、困るということはないと感じている。
公民館だよりには2度入校したが、1回目は事業の報告を書くコーナーであった。2回目は、今のコラムで、これだけのスペースに個人の意見を書くということでよいのか、という疑問を感じていたので、公運審のあり方を自分なりに書いた。しかし、だよりの編集会議の意向も無視することはできない。
公運審と公民館の存在をどう伝えるのか、独自の情報紙を発行すると決めたならば、いろいろと書くことはある。大変なのは当然のことだが、今のコラムだけでは全てを伝えるのは困難だ。

○委員：
今までの議論を聞いていて、編集委員としては少なくとも現在のスペースは続ける必要性を感じた。早速、継続について要望したい。
しかし、編集会議として、こういう記事を書いてください、ということを言ってしまっても良いものなのか疑問も残る。認められるかどうかは別のこととしても、コラムとは別の記事を、必要によっては掲載の提案があってよいのではないか。大会の報告とか、研修会で勉強した内容とか。

○職員：
財政逼迫の折、市の施策についても住民が自ら考えないといけないと思う。互いに問題提起する。市民は各地域での様子に関してアンテナを張る必要があろう。今あるものもスクラップして新しく立ち上げる時代に公民館も置かれていることを認識すべきだろう。何を捨てて、何を残すのか、公民館としての情報を発信することも必要だろう。
先日の公民館大会に参加して感じた。公民館だよりを全戸配布していることなどは、他の市の職員と交流することでよく見えてくることだ。ただ、毎日を安閑と過ごしていると、スクラップされてしまう時代だということを関係者は認識した方がいい。

○委員：
委員3年目だが、公民館という存在が市民に浸透していないと感じている。公民館は大事だが、その置かれている立場は大変困難な時代なのだろうと思う。それを克服するためにはどうしたらよいのだろうかと考えてみた。やはり多くの市民からの支持を得ないと、必要なくなってしまうと思う。1人でも多くの人に支持を得る方法を考えるべきだ。そのためには、公運審も公民館もまずはPRだ。

○委員：
大変乱暴な言い方になることを許してもらいたい。私は、公運審の存在は特に知られていなくても良いと思っている。それよりも、地域の人々に楽しく公民館を使ってもらう、私たちはそのために水面下で活動する存在だと認識している。私は、以外に多くの人が公民館を使っていると思う。外国人も来てくれているし、地域の人には身近な存在だと思われていると思う。少なくとも市役所よりは身近に感じてくれているだろうと思うが、それではいけないのか。
繰り返すが、私たちは縁の下で動く存在であり、表面に現れるものとは違うと思うが。

○委員：

少数の意見が切り捨てられる世の中は良いことではない。思いやりが大切なのだろうと思う。
私は、社会教育と生涯学習社会とは役割が異なるものと思っている。社会教育の終焉を唱える方がいるが、本当にそうなのだろうか。市民が育ち、教育は必要なくなったと仮定しても、いずれ社会教育の学びを理解しない人が世の中の大半になれば、またどうなのだろうか。それでも終りで良いのだろうか。
そういう意味からは、公民館の必要性等を多くの人に伝えるのは良いこととは思うが、公民館を生涯利用しない人がいても、これも良いと思う。でも、もしもそんな人が、ある日公民館が必要になったときに、門戸を開いているのが社会教育だろう。そのときになって使ってくれれば幸いだ。どんな人も切り捨てることのないのが公民館で、ずっと存在すべき施設だ。少なくとも西東京市においては。

○委員：
質問したい。公民館だよりの発行に関わっている職員数とそれに関わる全職務中の割合はどの程度か。市のホームページには、公民館だよりのPDFデータは掲載されていないのか。
また、独自の公運審だよりを発行するのに必要な予算は確保されているのか。

○職員：
職員は、各館から1人と館長を加えて7人だ。それに市民スタッフは、公運審から2人と公募の市民が3人で編集会議を行っている。職員の仕事の割合だが、3人の職員がトリオを組んで1ヶ月交代で紙面の割付を行うことになっており、担当月は担当者は一時的にかかりきりになるが、延べてしまうと公民館だより担当者といえども、そのことばかりを行っている訳ではない、具体的な数値が示せなくて申し訳ない。市のホームページには、公民館だよりのPDFデータは載せている。
予算の件だが、公民館だよりのような印刷や全戸配布等を外注する予算は、取れないと思う。委員各位がパソコンで編集、手刷りで印刷し、公民館のカウンターに置く。または戸別配布を可能な範囲で行うという程度であれば、インクと用紙代の要求は可能だし、今直ぐでも可能と思う。

○委員：
公運審そのものの機能を伝えるということは、時々、しかも正確に行うことは必要だろうという認識かと感じた。公運審そのものを伝えることの重要性はどう捉えたらよいのか、ということだと思う。それには両面あるということが、議論から理解できた。
公運審委員としてその活動を知らせたり、公運審という切り口で知らせたり、はたまた市民目線の物言いであったりということか。

○委員：
同じことを題材にしても、捉え方はいろいろあるということか。やはり話し合いが必要だ。

○会長：
本日の意見交換で、参考になった点を生かしてほしい。本日の議論は結論ではないが、もう少し掘り下げてみたいと感じる。今日は多岐にわたり過ぎたので、例えば公運審の役割、といったことなどもう少し焦点を絞ってみたい。正副会長で検討して、次回には再度練り直して提案できればと思う。本日はこの程度にとどめたい。

(5)　次回の日程について
1月27日（水曜日）　18時30分
於：田無公民館　第2学習室

○会長：
他に意見がなければ、閉会とする。